

宇部市の彫刻事業について*

On the Sculpture Enterprise of Ube City*

藤井 匡**

By Tadasu FUJII**

1. はじめに

宇部市は、現在、300点を超える彫刻を所有・展示している。宇部市では、1961年から野外彫刻展を開催、受賞作品を購入・設置しており、「彫刻のあるまちづくり」としては日本で最も長い歴史をもつ。本論では、この彫刻事業を“野外彫刻展”と“設置事業”から紹介する。

石炭を基盤とした工業都市として発展した宇部市

は、公害問題の克服を目標に、「宇部方式」と呼ばれる対策を実施する。加えて、生活環境の改善のため「緑化運動」「花いっぱい運動」を展開、さらに市民提言を基に、彫刻事業が開始される。

最初の展覧会「第1回宇部市野外彫刻展」は、特定人物の顕彰像や純粋美術としての彫刻ではない、まちづくりの視点をもった日本で最初の彫刻展となる。現在は名称を「現代日本彫刻展」に変え、二年に一度、継続開催されている。



図 - 1 第20回現代日本彫刻展（2003年）

*キーワード：まちづくり，彫刻

** 非会員，宇部市教育委員会文化振興課

（山口県宇部市常盤町1-7-1

TEL0836-34-8616，FAX0836-22-6066）



図 - 2 第1回宇部市野外彫刻展（1961年）



図 - 3 第4回現代日本彫刻展（1971年）

2．野外彫刻展の歴史

最初期の野外彫刻は、サイズも素材も、屋内の彫刻を野外へ持ち出したような作品が多い。野外彫刻が一般化しておらず、まだ経済的・社会的にも未だ「戦後」であったことを物語る。

1970年頃になると、大阪万博が開催されるなど高度経済成長期の風潮を反映して、工業の新素材と野外彫刻をテーマに展覧会が開催された。

1970年代後半以降は、耐久性のある素材が主流を占め、野外彫刻の概念が定着していく。時代の関心は、彫刻の造形的な面だけでなく、彫刻と野外環境との関係へと移行し、さらに近年は、彫刻と鑑賞者との関係が重視されるようになっている。

表 - 1 場所別の彫刻設置数

（2004年4月1日現在）

公園広場等	109	常盤公園	80
		その他	29
施設敷地	197	ときわ湖水ホール	163
		その他	34
道路敷地			21
保管中			10
合 計			337

ときわ湖水ホールでは展示替えを行いながら展示

3．彫刻設置事業

展覧会で受賞した作品は後に、市内各所で恒久的に展示される。野外彫刻では、周囲の景観や都市

機能との調和が重視されるため、作品個々の彫刻表現と場所の特性とを考慮して設置場所が決められる。

常盤公園のような自然環境豊かな大型の公園では、大型で様々な傾向の彫刻の展示が可能となるため、実験的な作品が多く展示される。また、幾何学的に整備された公園ではブロンズの人体像、運動公園では記念碑性の強い彫刻などが展示される。

市街地での展示には、都市機能を優先させる必要性などの制約が多く、自然的な景観に較べて、時間経過に伴う景観の変化も大きい。このため、一度設置した彫刻を移設するケースも増えてきている。

2000年には新たに、彫刻移設・ライトアップ事業として、市街地の彫刻22点の夜間照明を実施した。照明デザイナーにより、昼間とは全く異なった彫刻の表情が演出されている。さらに、2003年にはライトアップ彫刻の鑑賞ツアーや写真コンテストを実施している。



図 - 4 常盤公園の彫刻



図 - 5 市街地の彫刻



図 - 6 彫刻のライトアップ



図 - 7 現代日本彫刻展ワークショップ

4. 今後の彫刻事業

これまでの彫刻事業は、都市整備との関連が主要な着目点だった。しかし、第20回現代日本彫刻展記念シンポジウム「アートと出会うまちづくり」でも議論の中心となったように、現在、鑑賞者（市民）との直接的な関わりが求められ始めている。宇部市では、彫刻のボランティア・ガイド等の活動があり、2003年には前述の鑑賞ツアーや展覧会関連のワークショップが協働により開催された。

一方で、彫刻を宇部市の都市アイデンティティと位置づけ、「宇部市の顔」として国内的・国際的にアピールする事業への期待も寄せられている。

今後は、公共財産としての野外彫刻を活用して、まちづくりを進める手法の確立が課題となっている。